教育学研究科（修士課程）特別支援教育専攻，学校における支援体制

特別支援教育講座・吉松靖文

１．授業の基本情報・概要

対象授業の科目区分: 教育学研究科（修士課程）特別支援教育専攻
科目名: 学校における支援体制
担当教員名:吉松　靖文
登録学生数：6 名

小・中学校、高校等における特別支援教育の体制作りや、特別支援学校のセンター的役割の遂行に伴う諸問題・諸課題に対する取り組み方や改善・解決の方法について、グループ討議を通じて実践的に学ぶことで、小・中学校における特別支援教育の体制作りについての実践力を身につけることを目的とする授業である。

２．授業評価・授業研究の内容

最終試験後に授業評価アンケートを実施した。到達目標達成の自己評価を 7 件法による回答とそれぞれの回答の理由の自由記述で求めた。また，授業改善のための提言を求めた回答者数 5 名。回収率:83.3%。

到達目標「(1)小・中学校、高校等における特別支援教育のシステムの全体像を説明できる。」についてどれくらい到達できましたか。

回答者数
全くそう思う 3 名，ややそう思う 2 名
回答理由

- 機能的な校内委員会の設置についてなど意見を交わすことができた。
- 内容の理解だけでなく、現状等の具体的な事例等も話していただいたので理解が深まった。
- 現職復帰後、新学習指導要領の必要な項目を示し目標やシステム構築のための情報を提示したり、各種文献資料により現状と課題を説明することができる。
- 高等学校の特別支援教育のシステムの全体像についてあまり習得できていないから。
- 特別支援教育は担任やコーディネーターだけでなく、組織的に取り組まなければならないことを改めて感じた。特に校長のリーダーシップ、マネージメント力の重要性について学んだ。高校についてはまだ知識不足なのでさらに学ぶ必要があると感じた。

以上の通り，回答者全員が肯定的評価であった。

到達目標「(2)校内委員会と特別支援教育コーディネーターの役割について説明できる。」についてどれくらい到達できましたか。

回答者数
全くそう思う 3 名，そう思う 2 名
回答理由

- コーディネーターの役割やそのために教育活動の中でどう考え行動すべき考えを深めることができた。
- 実際に自分で調べたことの報告や現状の課題等を分かりやすく指導して頂き、実践への対応が学べた。
- 現職復帰後、各種文献や資料を用い、プレゼンテーションなどで簡潔に説明することができる。
- コーディネーターが中心となって他機関とも連携しながら行うことや、コーディネーター次第で校内委員会を充実させるか否かが理解できたから。
- 発表者等の話から他の小中学校の校内での取り組みを知ることができた。特にコーディネーターとして地域資源を学ぶことで、子どもに応じて連携・活用しけるようにならなければと感じた。また困難さを抱える保護者対応についても学ぶことができた。

到達目標「(3)個のニーズに応じた支援を可能にする学級・授業作りのポイントについて説明できる。」についてどれくらい到達できましたか。

回答者数
全くそう思う 2 名，そう思う 2 名，ややそう思う 1 名
回答理由

- 現状と課題から、どのような意識がスムー

ズな学級運営、授業づくりに向かうか多くの意見を聞いて学んだ。
- 現状の課題や学習指導要領、アセスメント等の読み取りなど、実際の現場で生かせる指導が多かったため、実践に生かすことができる学びになった。
- 研究実践校での研究やこれまでの実践を思い起こしつつ学ぶことができた。現職復帰後、研究実践校での実践をもとに、新指導要領や各種文献が示す支援の在り方についてより説得力のある説明ができると考える。
- 子どもが「分からない」と言える学級・授業づくりをしていくことが大切だと分かったから。
- ユニバーサルデザインとは何なのか改めて考える機会となった。誰のためのユニバーサルデザインなのか、個に応じた支援とは等、考えることで現場での支援について振り返ることができた。小・中学校についてどのような学級作りがされているのかさらに学んでいきたい。

以上の通り，回答者全員が肯定的評価であった。

到達目標「(4)保護者や学校外の諸機関との連携・協力の必要性について説明できる。」についてどれくらい到達できましたか。

回答者数

全くそう思う 4 名，そう思う 1 名

回答理由
- さまざまな諸機関があること、それぞれの役割、連携することでのメリットを学んだ。
- 現状の課題や実際の事例等を踏まえての具体的な指導が多かったため、現場で生かすことのできる学びになった。
- 研究実践校での研究やこれまでの実践現を思い起こしつつ学ぶことができた。職復帰後、研究実践校での実践をもとに、新指導要領や各種文献が示す支援の在り方についてより説得力のある説明ができると考える。
- 学級担任だけ学校だけでは、子どもにできることは限られているし、保護者や学校外の諸機関と連携することで、子どもの可能性を広げることができると分かったから。
- 県内の療育機関や相談機関など知ることができた。外部機関と連携・協力することで互いの弱さを補い合い、強みを発揮することができると感じた。また、移行支援という点においても卒業前から外部機関が家庭と関わっていくことで、一貫した支援につながると感じた。

到達目標「(5)個別の教育支援計画に必要とされることについて説明できる。」についてどれくらい到達できましたか。

回答者数

全くそう思う 3 名，そう思う 2 名

回答理由
- いろいろな学校の様式を見たり意見交換して、どのようなことを記述するか、それをどう共有するかを学んだ。
- 内容だけでなく、個々の実態に応じた課題等の立て方、評価の仕方等具体的な指導が多く、実践につながる学びになった。
- 当事者参画の下、家族や関係諸機関と連携して個別の教育支援計画を作成することが効果的・効率的であることが確証できた。この実践を一つの根拠に、現職復帰後学校現場で提示することができると考える。
- 作成するだけではなく、個別の教育支援計画をもつことでその子が一生、有益な支援を受けることができるように考えなければならないことが分かったから。
- 本人参加の重要性を改めて感じた。また、弱みだけではなく強みやそれのいかし方について指導計画・支援計画で引き継いでいく必要があると学んだ。各市や県外の相談支援ファイルについて学ぶことができ、今後の支援計画を考える上で勉強になった。

地域社会を核とした教育と研究のつながりの観点から見て本授業はそれを達成することに寄与しうると思いますか。

回答者数

全くそう思う 3 名，そう思う 1 名ややそう思わない 1 名

回答理由
- 意見交換や発表を聞いたことから、知識を増やしたり自分自身の考えを深めたりすることができた。
- 内容がとても充実しており、多様な情報を得ることができ、実践につながる学びになっていると感じる。
- 授業の中で学んだ様々な事例を自己の体験と参照して学ぶことができた。特別支援コーディネーターの役割や支援体制作りの在り方、拓かれた学校づくりの視点についても考えることができた。
- 何の研究かよく分からない。地域の機関についてはよく分かった。

- ペアレントメンター活動では、活動内容や経験を積んだ保護者が相談者になることで効果を上げているということを詳しく学ぶことができた。このような地域資源について保護者に情報提供していくために、可能なものは実際に見学、自分が体験したいと思った。また、校内でも積極的に共有したいと感じた、

本授業をよりよいものにするためにしたらよいと思うことを書いてください。

- 受講者による討論
- よりよいものにしたらよいことはない。自分で調べる講義だったので楽しかったし、勉強になった。その中での、吉松先生のお話がとてもためになった。

４．総括

到達目標達成に関する評価については，すべての到達目標に対し，全員が肯定的評価であった。授業者からみても，受講者全員がそれぞれの到達目標を達成していると評価することができ，両者の評価が一致していた。

地域社会を核とした教育と研究のつながりという観点では 1 名が否定的評価であった。回答理由が「何の研究かわからない」であり，この問題の内容が回答者に理解されなかったことが，否定的評価につながった要因と考えられる。本授業の位置づけや目的の観点から次年度以降の授業オリエンテーションの在り方に参考となる意見であったと思う。

授業改善についての受講者からの提言･提案はあまりなかった。「受講者による討論」という記述はあったが，今回の授業でも取り入れてはいた。しかし，より主体的に受講してもらうためにもこの点はさらに工夫したいと思う。